シリーズ・東北学院大学の教育を考える　　第1回

「自己チュウ」批判論の盲点

― 予言された「ナルキッソスの死」の意味 ―

教養学部　岩谷　信

『我々が徳・アレテー［よい人のよさ・幸せな人の幸せさ］の本性を研究するのは、たんにそれが何であるかを知るためではなくて、 我々自身がよい人・幸せな人となるためである。そういう結果が得られなければ、 我々の研究は無意味であろう。』（アリストテレス『ニコマコス倫理学』1103b27 ）

はじめに

今日は、今年度の幾つかの講義ノートのあちこちを繋ぎ合わせながら、私の倫理学系の講義の「さわり」の部分を、「予言された〈ナルキッソスの死〉の意味」という副題の付いた「自己チュウ批判論の盲点」という題で述べてみたいと思います。卒業生の皆さんには総復習だと思って聴いて頂ければ、幸いです。

さて、論題の中にあって、昨今の流行語の一つでもある「自己チュウ」の語源は、ご承知のことだと思いますが、「自己愛（ナルシシスティック）人格障害」の特性の一つとして挙げられる「自己中心性」という言葉であります。この「自己中心性」とはまた、教科書的に言えば、「自分のことを第一に考え、他人のことを考えることができない性質」のことであり、具体的な行動例としてよく挙げられるのは、「自分のものを人に分け与えたりはしない」とか、「人の許可を得ないでテレビのチャンネルを変える」とか、「自分の都合を他人に押しつける」とか、であります。

こんな人が側にいると、自分のことは棚に上げ、「非常識な奴」と罵りたくもなるのですが、しかしまたその一方で、『自己チュウにはわけがある ― 対人心理学から分かったこと（斎藤勇)』とか『ナルシシズム―自分を愛するって悪いこと（細井啓子)』とか、という本も売り出されているように、「自分のことを第一に考える」という「自己中心性」は、心理学的にみれば、これを端からマイナスの意味合いで捉えるのは間違いであるという主張も、よく聞かれます。私もまた、この「自己中心性」いう特性は、それの持つ倫理学的な意味を深く考えてみるならば、やはりマイナスの意味合いのものではけっしてないと考えます。否、むしろ、「自分のことを第一に考えること」を深く反省して、これを自覚的に超克しようと努めない限りは、「共によりよく生きるためのルール」としての「倫理」も、「共によりよく生きる」という意味

での「愛」も、その本来の姿で現れ出ることはないと考えるのであります。

倫理学系の講義で私の語り続けてきたのは、このことなのでありますが、はじめに、この「自己チュウ批判論の盲点」という論題を、本日のこの最終講義のために選んだ私なりの理由を、緒論というかたちで、少しく述べさせていただきます。

他人によって傷つけられることはなく、自分でしか傷つけることのできない自尊心

さて、いつの頃からか、担当科目の試験の際、どの科目でも、講義ノートの内容や私の口頭での説明で一番印象に残っている言葉を、答案用紙の裏面に書いて貰っております。今度の倫理学系の科目の期末試験で一番多かったのは、「他の人が君の自尊心を傷つけることは決してない。君の自尊心を傷つけることができるのは、君しかいない！」という言葉でした。

どうして学生諸君がこれらの言葉を覚えていてくれたのか、調べてみたいとも思うのですが、いまとなっては詮方ありません。しかし、はっきりしていることが二つあります。一つは、この言葉は、道徳性の必要条件としての「主体性」を説明する際に、その総括として述べた言葉だということであります。いま一つは、私の言う「自尊心」とは、「自分の生き方の原則を尊ぶ心」のことだということです。言いかえれば、自己の行状を「自己の生き方の原則」に可能な限り対応させようとする態度の謂いであって、この「自尊心」を英訳すれば、後でも触れますが、"self-respect" に当たるということであります。したがって、この「自尊心」は、自らの行状とその結果を他者がどう思うかを気にして、その毀誉褒貶でもって一喜一憂する態度でもなければ、自らの行状とその結果の優劣を、他者の行状とその結果と比較して評価しようとする態度でもないのであります。

加えて、いま一つ、この「自尊心」を具体的な例で説明するときに「演習」としていつも学生諸君に訊くのは、「メロスはなぜ走ったのか」、漱石の『こころ』に出てくるあの「先生はなぜに自死したのか」という問題だということであります。

「メロスはなぜ走ったのか？」 この問題は、一昨年のあの「教養バイキング」で「言語コミュニケーションの倫理学的基底」の話しをするときにも触れましたが、今日は別の視点から取りあげます。メロスは言う、「信じられているから走るのだ」、と。メロスの走った理由は、「お互い相手の信頼を裏切ることはするまい」という彼がこれまで生き抜いてきた「生き方の原則」を最後まで守って生き抜こうとしたからであります。「先生はなぜ自死したのか？」 こちらのほうは、漱石の描いたあの先生の「心」のなかに、思うに、あの『ツアラツストラ』の中でニーチェが語った以下の言葉があったからです。「もし友が君に邪悪なことをしたら、こう言うがいい。君が私にしたこと、それを私は君に許す。しかし、君がその行為を君に対してしたということ、そのことを許す資格がどうして私にあるのだろうか（第二部３節）」。

つまりは、友人への裏切を自覚していたあの先生は、二人の友情を支えていた「人間の絆」としての「お互い相手の信頼を裏切ることはするまい」という「倫理的」な「生き方の原則」に対応しない行動を取ったことを恥じて、自らをいつか裁かなければならないと思い続けていた人なのであります。言いかえれば、先生は彼の「自尊心」を自らの「エゴイズム」でもって傷つけたことに対する裁きを、乃木将軍の殉死を知って、自死というかたちで執行したのであります。

漱石がニーチェの本を読んでいたことは事実です。そこで、いつか漱石の蔵書を調べてこの解釈を実証できればと、実は、密かに考えておりますが、それについてはいまは措くとして、誰にでも、「このことをしてしまえば、自分が自分でなくなる」とか、「いまここでこのことをしなければ、自分が自分でなくなる」と思ったことがきっとあるにちがいありません。この種の体験は、私の言う意味での「自尊心」がなければ、けっして出来しないことなのであります。

学生諸君があの「自尊心」という言葉に感応したのは、あるいは、彼らの自ら思い当たったこの体験であったのかもしれません。このことの当否もいまは確かめることができませんが、いずれにせよ、この意味での「自尊心」は、倫理学の世界では、「主体性」を論ずる際のキーワードなのであります。そしてまたこの「主体性」は、人格としての我々のあり方ないしは生き方の可能性の一つであるあの「道徳性」の必要条件となるものです。なぜかといえば、道徳的人格とは、「自己の生き方の原則」として選んだ「倫理」と自己の遂行する「行為」との「対応性 」を重んずる人間のことだからであり、「自己責任」という言葉も、本来はこの「対応性 responsibilia」のことを言うものだからであります。ちなみに、この「自己責任」感の弱い人間は、他者に対する「責任感」もたいていはあまり強いとは言えないのであります。

他人によって簡単に傷つけられるプライド（自尊心）

とはいえ、このような話しを講義でしながらも、一つ、ずっと気になっていたことがありました。ここ数年、私は、卒業研究での指導の一環として、「コミュニケーション力」や「共感力」や、さらには「ルサンチマン」や「愛」といった事柄に関心を持った学生諸君たちと一緒に、幾冊か、「自己愛人格障害」関係の本を読んできました。この種の本を一緒に読み続けたのは、彼らの抱いた卒業研究のテーマを裏側から考えることができると思ったからであります。その読書会のなかで気づいたことが二つあります。一つは、『ナルシシズムの時代（C.ラッシュ）』や『自己愛人間（小此木）』の流れを汲んだ昨今の「自己愛（ナルシシズム）」論や「自己チュウ」論には、あのフロイトやコフートの所論を基にした「誇大自己」とか「自己愛憤怒」とかという言葉と共に、「自尊心」や「プライド」という言葉が頻繁に出てくるということです。いま一つは、その「自尊心」も「プライド」も、「他者によって傷つけられる自尊心」で

あって、「他者によってではなく、自分でしか、傷つけることができない」と私の言うところの「自尊心」ではないということであります。

そしてまたこのことを確認するために、改めて、関連する原典を覧たときに分かったのは、昨今の「自己チュウ」論での「自尊心」や「プライド」は、例外もありますが、ほとんどが“self-esteem”の訳語として使われている言葉だということです。すなわち、そこでの「自尊心」とは「自己評価」の謂いなのであります。しかも、この「自己評価」も、先に述べたあの「自己責任」の確認ということではなくて、正確には、「自己イメージ」に対して当人によって下される肯定的な評価であると共に、この肯定的評価に伴って感得される「快感」のことなのであります。しかし、私の言う意味での「自尊心」の「自」とは、あくまでも「自らの生き方の原則」そのものであります。この「原則」は、様々に思い描かれる「自己イメージ」とは違って、何らかの事態を実現しようする自らの行状としてだけ具体化され、その行状のうちに現れ出るしかないところのものなのであります。したがってまた、私の言う「自尊心」は、それに基づく自らの行状の結果を、他者の似たような行状の結果と比較して初めて感じ取られる優越感や劣等感としての「快感」や「不快感」などとは直接的にはけっして関係のないものなのであります。

そんな訳で、或る時期から、講義で「自尊心」の話しする際には、「これは、最近の自己愛（ナルシシズム）論によく出てくる〈自尊心〉とは全然違うものだ」と必ず付け加えてきました。そしてまたその際、すぐに私は、「しかしこれについては、時間がないので、他の機会に…」とだけ述べて、それ以上は説明しないで、正確には、それ以上説明する準備をしていなかったからでありますが、話題を別のことに変えて、講義を先へと進めておりました。

そうした或るとき、いつ頃だったかも、何が機縁だっかも、失念しましたが、先ほど、貴重なお話をお聞かせいただいた福地明子教授と研究室で雑談していたとき、気になっていた「自尊心」のことをふと想い起こし、日本語の「プライド」や「自尊心」を英語で一般的になんと言うのかとお訊ねしたことがありました。そしてまたそのとき、「自尊心とは、他者によって傷つけられはしないはず」という話しもしたのであります。その際、福地教授から私は、「面白い話しだから、どっかにちゃんと書いてみたら」と言われたのでありますが、もちろん、生来怠惰な私は「どっかにちゃんと書いて」みることはこれまでしておりませんでした。しかし、その後まもなく、福地教授から、ＯＥＤにある“Pride”の項を書き写したメモを頂きました。私としては、「自尊心」の話しをしたことなど、すっかり忘れていたのでありますが、そのメモを読んで、“Pride”にも、大別して、二つの意味が古くからあることを初めて知ることができました。すなわちそれは、一つは、“Self-esteem”であり、いま一つは、“Self-respect”であります。言いかえれば、一つは、「自分自身の資質、業績ないしは所有財についての高いあ

るいは尊大な overweening 見解。他者への優越感や軽蔑心という感情や態度の基になるところのもの。自制のない自己評価 inordnate self-esteem)。c-1000」であり、いま一つは、「自己自身や自己の立場に相応しいあるいは帰せられるべきものについての意識ないしは感情。これらは、人に、自らに相応しくないとか値しないと考えることを行わないように働く。特に善い性質としては、「理に適ったプライド」とか、「正直なプライド」とか、あるいは「適正なproperプライド」とか「自尊心 self-respect」とか；等々。」であります。

また、その際に思ったのは、「適正なプライド」とそうでない「プライド」とは、他者との諸々のコミュニケーションの場で「自制心」や「自省心」が働くか否か、によって区別できるのではないかということでした。そしてまた、「適正なプライド」には、人格を人格たらしめる確固たる自己意識を基盤とした「自制心」や「自省心」が関与しているかぎりは、倫理学の講義でこれまで私が述べてきたことも、つまりは、「自尊心」とは「自分の生き方の原則を尊ぶ心」であって、「自分でしか傷つけることのできないものだ」と主張することも、必ずしも間違った説明ではないと思って、安心したことを覚えております。そうしてまたその後で、Ａ・ローウェンの『ナルシシズムという病―文化・心理・身体の病理』（新曜社）を読みました。この本の最終章で、「真の畏敬 respect は表層あるいは外見を問題としないで内面的な現実に目を向けるものであって、それはナルシシズム的な態度の正反対となるものなのである。…。ナルシシズム人間は自尊心 self-respect など持ってはいないのだ（301頁）」という一節に出会ったとき、似たような考えの人もいるのだと思い、我が意をさらに強めたのであります。

そんなこともあって、本日、はからずも福地教授と一緒に最終講義をする機会を与えられたというのも何かの縁かと思い、これまで考えないできた「自尊心」概念の多義性の孕む問題性を、「インターパーソナル・コミュニケーション」論の陰画としての「自己愛」論や「自己チュウ」論と結びつけて、少しく論じてみようと思った次第であります。

「自己愛」概念の三つの意味：慣習的・心理学的・倫理学的

前書きが長くなりましたが、このように思ったのには、個人史的な理由だけではなくて、もちろん倫理学的な理由もあります。すなわちそれは、あのＡ・ローエンが述べているように、「ナルシシズム人間」には、「自己イメージに基づくアイデンティティ」はあっても、真の「自尊心」などはないということであるかぎり、この「自尊心」概念の曖昧さを放置しておくならば、冒頭でも少しく述べましたように、「適正なプライド」に不可欠なあの「自制心」や「自省心」の重要性も、「ナルシシズム」としての「自己愛」や「エゴイズム」としての「自己愛」と表裏一体の「ニヒリズム」の問題性も、覆い隠されたままとなり、結果的には、我々自身が、その一回限りの「人生の意味」の問題として、「共によりよく生きるためのルール」としての

「倫理」や「共によりよく生きること」としての「愛」の問題を考えるのを怠ってしまいがちになるのであります。ちなみに、精神分析学者のＡ・ローエンは、あの著作で「主体性」の構造までは論究しておりません。彼が力説するのは、心身一体の生き生きとした「自己感情」が「ナルシシスト」には決定的に欠けているということなどですが、その彼も、「自尊心や品格dignity」の欠如は、時代の生み出した「道徳的な堕落」であると述べてはおるのであります（前掲書、298頁）。

話しが突然大事になってしまいましたが、「病める社会の病める魂」についての上記の懸念とはこれまた一体どういうことなのでしょうか。一緒にこれを考えて貰うためには、昨今の「自己チュウ」論や「自己愛」論を読んで私の気になっていることを、いま一つ、述べておかなければなりません。すなわちそれは、最近、或る種の犯罪の裁判文書や新聞などでのその事件についての解説文にまで、「自己中心的」とか「自己愛（ナルシシスティック）人格障碍」という言葉が使われるようになったためか、最近では、「自己愛」ないしは「自愛」が「ナルシシズム」と同義の言葉として多くの人々によって用いられて、さらには、「自己中心的な人間」は人間としてのあるべき姿ではないとまで論じられもしていることであります。はたしてそのように簡単に言うことができるのか、このことが気になっていたところであります。

そこでまず、「自己愛」ないしは「自愛」の意味と「ナルシシズム」の意味とは覆合するものではないということや、「自己愛」や「自愛」は、心理学的にも倫理学的にもけっして端からマイナスの意味合いで捉えられてよい言葉ではないということを、ここで確認しておきたいと思います。

さて、「自己愛」や「自愛」には「ナルシシズム」以外にも多くの意味があることは、小学館の『日本国語大辞典』を引いてみれば、一目瞭然であります。その「自愛」の項を見れば、歴史的に堆積した五つの意味が記載されております。その第一は「自分自身を大切にすること、自分の体に気をつけること」、第二は「品行を慎むこと、自重すること」、第三は「物を大事にすること、珍重すること、またはそれに値するさま」、第四は「自分の利益をはかること、利己」、第五は「自己保存の自然の感情」であって、しかも、この第五の説明には、「この感情が、他人への愛の根底にあるとする見方と、他愛とは別個であるとする見方がある」と付記されております。またこの「自己保存の自然の感情」というのは、後で触れるカントの「アイゲンリーベ」やフロイトの語る「一次的ナルシシズム」にも通じると言われてよいのですが、いずれにせよ、いま述べた第四と第五は、明治時代に欧米の諸々の学問を輸入した際に、“self-love”や“Selbstliebe”などの訳語の持つ意味として我が国に定着したものであります。

してみれば、さしあたり明らかなのは、日本語の「自愛」や「自愛心」や「自己愛」には、確かに「利己」というマイナスと意味合いもありますが、しかし、けっしてそれだけに尽きる

わけでもなければ、「ナルシシズム」に特有な「自分だけを大切にする」という使用規則も、幸いにもまだ慣習化してはいないということであります。それゆえ、うかつに「自己愛」や「自愛」を使うと、日常的にも学問的にも対話が成り立たなくなってしまうこともあると言われなければなりません。

このことは早くから倫理学の世界では指摘されていたことであって、あのカントも『実践理性批判』の中で、「自己愛 」が定訳になっている“Selbstliebe”の在り様を次の二つに峻別して論を組み立てております。すなわち、一つは、“Eigenlibe”としての「すべてにまさって自分自身に対して好意を寄せること（philautia）」であって、いま一つは、「 Eigendünkel」としての「自分自身にいい気になること、つまりは自惚れ（arrogantia）」であります。その際にカントはまたさらに次のことを述べております。すなわち、「純粋な実践的理性は、“Eigenlibe”を、自然的に、そしてまた道徳法則に先だって我々の心中で活動するものとして、ただその道徳法則との一致という条件だけに制限する」、と。カントの語る「純粋実践理性」や「道徳法則」の学術的な意味はここでは措くとして、厳格主義者と言われたあのカントですらも、先に挙げた辞書での第一や第五の意味での「自愛」や「自己愛」は、それ自体、けっして端から「反道徳的」なものではない、と考えているのであります。

このことは、「自己チュウ」や「自己愛」を論じる論文や著作に必ずと言っていいほど登場するジクムント・フロイトとハインツ・コフートの所論に照らしても言えることであります。彼らの所論について門外漢の私は詳細に論ずることはできませんが、今日の話しの結論に至る行程で必要となることだけに限って、彼らの所論をここで少しく見ておくことにしたいと思います。

フロイトやコフートの「ナルシシズム（自己愛）」論・管見

さて、フロイトは、その『ナルシシズム入門』の中で、「性的倒錯」の一種とされていた「自体愛 Autoerotismus」としての「ナルシシズム」を、性愛性を含まないかたちで定義し直しております。すなわち、彼に従えば、「ナルシシズム」とは、「すべての生物が当然その一部をもつことのできる自己保存のエゴイズムをリビドー面で補足するもの」であります。つまりは、「人間生活における自己保存本能の自己中心性に対するリビドー補給」のことなのであります。フロイトは、乳幼児の抱くこの「ナルシシズム」を発達論的に「一次的ナルシシズム」と呼んで、これを「二次的ナルシシズム」から厳しく区別して考えます。彼に従えば、この自己自身に対するリビドー補給は、乳幼児の成長の過程で、やがて自然に、「対象愛」というかたちで、母親という、自己とは異なる「対象」へと向けられます。その後で、この愛が拒絶されるなどして頓挫した場合には、リビドー補給がその対象から撤退して、いま一度自己の方へ

と引き籠もり、もっぱら自己自身だけにリビドー補給が行われて、その状態が続くことになります。フロイトはこの状態を「二次的ナルシシズム」と称し、このことでもって「誇大妄想」等の神経症の起源を説明できると考えたのであります。

フロイトのこの主張が今日の諸種の精神分析理論の源流であることは、ご存じのとおりであります。ここでは、フロイトの理論についてこれ以上は深入りできませんが、しかし、次の四つのことだけは確認しておきたいと思います。第一は、すでにこの『ナルシシズム入門』の中で「ナルシシズム」と「エゴイズム」や「自己中心性」がほぼ同義語として述べられていることであり、第二は、「自己愛」ないしは「自愛」と訳されるドイツ語の“Selbstliiebe”が「ナルシシズム」の意味で使われていることであります。第三は、これらの言葉が、生物学を基盤とした最広義の心理学的意味のものだということであって、第四は、フロイトが否定的な見解を示したのは、「二次的ナルシシズム」の方だけであり、しかも彼のこの否定は病理学的なものであって、けっして倫理学的な意味合いのものではないということであります。

もう一人、コフートの方は、これまたご存じのとおり、フロイトが構築した「対象関係」の発達モデルに対して、別のタイプのモデルを構築して有名になった人物であります。フロイトが構築したのは、先ほど述べたように、「自体愛」から「ナルシシズム（自己愛）」を経て「対象愛」へ至る発達モデルであります。このモデルの特徴は、成長のいつか或る時期に「他者愛」が「自己愛」に取って代わるのが人間としての正常な発達であって、一箇の人間において「自己愛」と「他者愛」とが同時に併存しはしないと考えられていることであります。これは、長い婚約時期を経てようやく結婚した妻のマルタを献身的に愛し続けたフロイトに、いかにも相応しいモデルだと言ってもよいのかもしれません。

一方、コフートは、このモデルに代えて、「自体愛」から「ナルシシズム（自己愛）」を経て「高次のナルシシズム（自己愛）」へと至る発達モデルを構築しました。彼に従えば、フロイトの言うように、発達の過程のなかで「ナルシシズム（自己愛）」が「対象愛」に変化するということはないのであって、愛する「対象」との関係の中で「ナルシシズム（自己愛）」それ自体が「より高次な」ものへと「成熟」していくのであります。コフートは、それゆえに、この「ナルシシズム（自己愛）」は人間の一生においてけっして消滅することはないと主張したのであります。彼に従えば、「自己愛人格障害」の多様な姿とは、この「ナルシシズム（自己愛）」の発達ないしは成熟がそれの或る段階で「停止」してしまった結果として、現れる出るところのものであって、その「停止」を「進行」に変える治療法として彼の構築した理論体系が「自己心理学」なのであります。

それでは、コフートの発達モデルの最終段階としての「高次のナルシシズム（自己愛）」とはどういうものなのでしょうか。すなわちそれは、「自分を心から愛してくれる人」としての

「鏡自己対象」、「安心感を与えてくれる人」としての「理想化自己対象」、「同じ人間だと感じさせてくれる人」としての「双子自己対象」、この三つの「自己対象」に恵まれて強化された「ナルシシズム（自己愛）」のことであります。「自己対象 selfobject」とは、コフート独自の用語であり、客観的にみれば一箇の独立した対象・人間ではありますが、主観的には自己ないしは自分の延長として感じられる対象・人間であります。例えば、子どもにとっての親とか親友とかがこれにあたります。子どもが「すごいでしょう」とか「悲しい」とかと言ったとき、その発言を肯定的に受け止めて、誉めてくれたり、慰めてくれたりする場合の母親が「鏡自己対象」であり、父親の膝に抱かれて、自分は立派な父親の子だと安心でき、自分もいつかこの父親のようになりたいと思って、人生の確固たる自標や生き方を得たと安心できる場合の父親が「理想化自己対象」であって、さらには、「俺は実はつらいんだ」と言ったとき、「僕も同じだよ、だからお互い一緒に頑張ろう」と応えてくれて、慰め励ましあうことのできる場合の友人が「双子自己対象」なのであります。コフートに従えば、あの「自己愛人格障害」の様々な様相は、つまるところ、この三種の「自己対象」に人生の過程で出会うことができないでしまい、人格の核が未確立なまま、肯定的な「自己感情」を持ち得ない場合に、何かを機縁として発現するところものなのであります。

コフートはこの「中核的自己感」について『自己の治癒』の或るところで、次のように述べております。「自己が堅固なものになっていくとは、自己を対象から独立したものにすることではない。そうではなくて、自己の堅固さの増大が、…、自己自身を維持するために、その自己対象を利用するという自己の能力を高めるのである」と（みすず書房、114頁）。コフートはここで、“to use self-object for its own sustenance”という言葉を使っております。彼に従えば、「自己愛人格障碍」の治療の目標は、治療対象である患者自身が「他人を自分のためにうまく利用できること、その選択肢の幅を広げること」を助けるということにあるのであって、「利用すること」と「幅を広げること」のこの二つがうまくできるというのが、「心の健康」という状態なのであります。その意味で、各人の「自己愛（ナルシシズム）」を容認するコフートは、自他に厳しかったフロイトとは違って、確かに、「ナルシシズムの時代」の多くの「自己愛人間」にとっては「やさしいお医者さん」であった人物なのであります。

してみれば、いま確認できるのは、「ナルシシズム」とは「自己愛」だと言われたとしても、フロイトの場合でもコフートの場合でも、この「自己愛」や「自愛」は、倫理学的には端からマイナスの意味合いを持ってはいないということであります。フロイト流の神経症でも、コフートの言う「自己愛人格障碍」でも、確かにそれは、当人にとっても周りの人にとっても、「禍」ではあるとはいえ、けっして「悪」とは言えないものなのであります。しかしまた、それではなぜに「ナルシシズム」としての「自己愛」や「自己愛人格」の「自己中心性」は、世

間では諸悪の根源であるかのようにときとして言われてしまうのでしょうか。続いて、この問題を一緒に考えてみようではありませんか。

「自分を愛するって悪いこと？」：利己主義（エゴティズム）と「真の自己愛」

さて、冒頭で挙げた本の副題で「自分を愛するって悪いこと？」と尋ねた細井啓子氏は、その本の末尾でこの問いに、「〈自己愛（ナルシシズム）〉とは何でしょうか。どうもエゴイズム（利己主義）と混同しているようにみえます」と述べております（260頁）。先に挙げた国語辞典にも、確かに「利己」が、多義的な「自愛」の第四の意味として示されておりました。しかし、「ナルシシズム（自己愛）」と「エゴイズム（利己主義）」との関係には、「混同」と言って簡単にすますわけにはいかないものがあります。それというのは、「エゴイズム」は心理学でも使いますが、「利己主義」の方はまぎれもなく倫理学プロパーの術語だからであります。

「ナルシシズム」としての「自己愛」を「利己主義」と混同する人たちは、あるいは、「不健康な自己愛」や「不健全なナルシシズム」を「利己主義」だと考えているのかもしれしません。あの小此木氏は或る論文の中で、「ナルシシズムとは不健康な自己愛のことであって、健康な自己愛はナルシシズムではない」と述べております。しかしそうであっても、やはり、「健康」と「不健康」の違いは、けっして「善」と「悪」の違いと同じと見なすわけにはいきません。というのは、抽象的にではなくて、具体的に「善」と「悪」の違いを論ずる際には、倫理学では、はじめに私の述べたあの種の「自尊心」の要としての「生き方の原則」を、つまりは各自の人格としての確固たる主体性を、無視できないのでありますが、しかし、「健康」と「不健康」の違いを論ずる際には、各自を「人格」と見なす必要はないからであります。ちなみに、この点については、「自尊心の欠如」は「道徳的な堕落」だと言うあのＡ・ローウェンも、その立論の基点がパターナリスティックな精神分析理論であるためか、立ち入っては論じてはいないのであります。

問題は、しかし、上記の「ナルシシズム(自己愛)」と「エゴイズム(利己主義)」の混同だけではありません。例えば、「ナルシシズム(自己愛)」という言葉が我が国のメディアに定着しはじめたころ、ハビエル・ガラルダ神父は、その『自己愛とエゴイズム（講談社現代新書955)』の中で「ナルシシズム」を「エゴイズム」として捉え、以下のような主張をしております。すなわち、「自己愛はナルシシズムではない」し、またそれゆえに、「人生の進路を示す」ものとしての「真の自己愛」をけっして「ナルシシズム」や「エゴイズム」と混同してはならない、と。

してみれば、「自己愛」と「真の自己愛」との違いは奈辺にあるのかという問題も、ここで我々は考えて見ないわけにはいきません。この点に関して言われなければならないのは、次の

ことです。先ほど述べたフロイトやコフートの説く「自己愛」ないしは「自愛」としての「ナルシシズム」は「真の自己愛」とは全然違うし、「真の自己愛」はまた「エゴイズム（利己主義）」なんかでもけっしてない、と主張する人々が、以前から少なくなかったということであります。話しが少し前に戻りますが、例えば、エーリッヒ・フロムはあの『愛するということ』のなかで、「自己愛」と「他者愛」とは二律背反的なものだと説くフロイトの考えに対して異議を唱えております。フロムの論拠とするのは、一言で言えば、子供を真に愛して、子供と「共によりよく生きる」ことを願う母親は必ずや自分自身をも慈しむということであります。このことは、思うに、誰かと「共によりよく生きよう」と心底願う人には、誰にでも当てはまることであります。そしてまたフロムに従えば、「他者愛」と切り離された「自己愛」というのはけっして本当の「自己愛」ではないのであって、「隣人愛」や「人間愛」というのも、実は、「自己愛」と「他者愛」とのこの併存を促す言葉以外のなにものでもないのであります。

ちなみに、このようなフロムの思想はあのコフートに影響を与えたと言われもしております。自他が共に「自己対象」となってお互いが上手に「依存」しあうという人間関係が「健康な人間関係」なのだと説くコフートの心理学をフロムの思想と結びつけるのは確かに不可能ではありません。しかし、「愛する・愛される」という関係と「利用する・利用される」という関係とが同じことだと思う人は、果たしてどれだけいるのでしょうか。フロイトが真剣に考えた「他者愛」をコフートがどれだけ本気で考えたかは、彼が重視する「エンパシー・共感」が、「他者」への「愛」無しでも可能な「他者認知」の手段でしかないことを思うとき、少しく私には気になるところであります。

とはいえ、いずれにせよ、ここでさしあたり言われてよいのは、個人の生物学的心理学的な領域から作り出された「ナルシシズム」としての「自己愛」と、人格としての他者との重層的な関係を包含する「真の自己愛」とはやはりまた区別して考えられなければならないということであります。いま一つは、昨今の「自己愛」論や「自己チュウ」論に、私の言う意味での「自尊心」が、つまりは、「自己の生き方の原則を尊ぶ心」が登場しないのは、「ナルシシズム（自己愛）」の「健康」と「不健康」との相違が前面に出て、主体性を等閑視する限りは、当然のことだということであります。そしてまた加えて、ここで言われなければならないのは、以下の二つのことであります。その第一は、時には「ナルシシズム」としての「自己愛」と混同される「利己主義」というのは、単なる心理学的な「エゴイズム」とは違って、一箇の歴とした「生き方の原則」だということであります。第二は、文字通り「自己中心的」なこの「利己主義」だけが、我々の持ちうる唯一の「生き方の原則」だとは、けっして言えないということであります。なぜかといえば、我々には、この「利己主義」を超え出て、「共によりよく生きる」ための「ルール」としての「倫理」を自らの「生き方の原則」として生きる可能性が間違

いなく具わっているからであります。最後にこのことを我々は、倫理学の存亡を賭けて、確認しておかなければなりません。そうすることでもって、我々は、「ナルシシズム」から「エゴイズム」へ、「エゴイズム」から「真の自己愛」へというかたちで、あの錯綜した「自己愛」概念を整理することが出来るだけではなくて、昨今のパターナリスティックな「自己チュウ」論や「自己愛」論の「盲点」を、つまりは「自省心の二層性の無視」を、指摘することができるのでないかと思うのであります。

予言された「ナルキッソスの死」の意味：意識対象の交代がもたらす行為遂行の「不自然化」

さて、いま、「自省心の深化」と言いました。これが、今日の話しの副題とした〈予言された「ナルキッソスの死」の意味〉に込めたものなのであります。「ナルシシズム」の語源この「ナルキッソス」というギリシア神話の美少年の名前だということはご存じだと思いますが、しかし、我が国の昨今の「自己チュウ」論や「自己愛」論では、「自己イメージ」への「惚れ込み」の話しは出てきても、この「予言されたナルキッソスの死」の意味まで論究しているものはあまり見受けられません。そこで、少しく補足しておきたいと思います。

あのナルキッソスは、生まれてまもなく、「自分自身を見なければ、長生きする」と予言者テレイシアースによって、告げられております。後に、ナルキッソスは、水面に映った美少年に惚れ込んで、眺め続けていましたが、或るとき、遂にそれが自分自身であることに気がつきます。しかし、そのとき、思い焦がれてすでに、憔悴し切っていた彼はその場に崩れ落ちるように死んでしまいます。後に、その場所に一輪の水仙（ナルキッソス）の花が咲いていることに森の精たちは気づいたのであります。

この神話は何を物語っているのでしょうか。思うに、それは、我々人間の「自意識」あるいは「自己意識」つまりは「自省心」の出来の事情を物語っているのであります。我々の意識というのは普通は外界に向かっていて、我々は、「いま自分は何をしているのか」は意識しないまま、様々なことをしております。しかし、その気になれば、その意識を我が身に反転させて、「いま自分は何をしているのか」を思うことができます。外界から自己自身へのこの意識の反転は、いまここですぐにでも確かめることができるのでありますが、気づいて貰いたいのは、何かに没頭している自分の行為を意識し始めると、その行為がしづらくなってしまうということであります。予言された「ナルキッソスの死」というのは、この行為遂行の言うなれば「不自然化」のことを示しているのであります。このことを、卑近な例で説明し直してみたいと思います。私が、夜、テレビ映画を夢中になって見ているとき、ふと、明日の講義の準備がまだ出来ていないことに気がついて、「テレビなど見ている場合ではない」と自分の行為を意識したとしましょう。このとき私に何が起るのでしょうか。私は、一瞬、考えます、テレビを見続

けるか、あるいは止めるか、を。私はまた考えます、どっちがよいか、を。私は、見続けるのが「よい」と思えば、見続け、「悪い」と思えば、見るのを止めてしまいます。どちらを選ぶかは私の自由なのであります。しかもその間、映画を見るという行為が、一瞬といえども、中断されて、映画のなかでの俳優の台詞の把握がうまくできなくなってしまっているのであります。

それではこのときの「よい・わるい」という価値判断の基準は何なのでしょうか。それは、私にとって「よい」のか「わるい」のかということ、つまりは無自覚的に働いている「エゴイズム」という「生き方の原則」であります。しかも、私は、否、人間は誰でも、なぜか、思うにヒト特有の脳の構造によって、自分の行っていることを、つまりは「行為」を、意識し反省できるだけではなくて、さらにこの無自覚的な「エゴイズム」という「生き方の原則」そのものをも意識化して反省することができるのであります。

自己の「行為」ではなくて、その根拠や基層としての自己の「生き方の原則」そのものを自覚したとき、ここでは何が起こるのでしょうか。このときもまた、先のテレビを見ているという行為を意識化したとき同じことが起こるのであります。すなわちそれは、この「エゴイズム」という生き方を続けるか否かが、我々の自由選択の課題となるのであります。私がこの生き方で「よい」と思えば、「エゴイズム」の原則で生き続けていきます。もし、これでは「よくない」とか「わるい」と判断したならば、「エゴイズム」という生き方を止めてしまい、場合によっては、「他の人と共によりよく生きよう」という倫理的な「生き方の原則」を選ぶことも、不可能ではないのであります。このように自己の「行為の仕方」を選ぶだけではなくて、その根底に潜む「生き方の原則」をも選ぶ可能性が我々には具わっているというのは、体験的に言って、誰もが否定できない「人間本性」と言ってよいものであります。もしそうでなければ、倫理学の原点でもある「人生、いかに生き、何をなすべきか」という問題で誰一人としてこれまで悩むことはなかったはずです。

私は、聖書の冒頭にある「楽園消滅」の話も、「ナルキッソスの死」と同じく、人間における「自省心」の出来を、つまりは志向的意識の「対象」を外界から自己自身へと「反転」させるという態度変更の出来を記述したものだと考えます。アダムと女は、ヘビに唆され、木の果実を食べると同時に、「善悪」を知って、かつまた、「自分たちが裸である」ということ、つまりは自分自身がいかに在るかということを知りました。創世記の著者は継時的に書いておりますが、正確には、「木の果実を食べること」つまりはこの意識の「反転」の出来こそ、我々の「自己意識」「自由意識」「価値意識」という三つの意識の同時的な発現の根拠なのであります。「それを食べると目が開け」というヘビの語る「目」とは、「木の果実」を「おいしそう」と見た目ではなくて、自分自身を見る「目」つまりは「自省心」のことなのであります。そうして、この「目」をもったアダムと女は、そのとき、自己の「行為の仕方」と「生き方」との二つを

反省できない動物の次元を超え出てしまいます。言いかえれば、「楽園」に生きていた動物としての生は「不自然化」してしまい、動物としては「死」んだも同然となり、しかもまた同時に、それまで動物として生きてきた「楽園」も「茨とアザミ」の野に変わってしまい、その荒野で二人は人格としての新たな「生き方」を始めざるを得なくなったのであります。

つまるところ、あの二つの神話の語る「死」の背後には、人間とは自己の「行為の仕方」の「よし・あし」だけではなくて、「生き方」そのものの「よし・あし」までも意識化し反省できる存在だという人間観が控えておるのであります。そしてまた、我々の誰もが体験的に実感できるこの人間観・人格観を踏まえて、私は、「自己中心的」な「エゴイズム」だけが我々の持ちうる唯一の「生き方の原則」であるとは、けっして言えない、と述べたのであります。とはいえ、ここまでくれば、もう一つ、我々の考えなければならない問題があります。すなわちそれは、自らの「エゴイズム」を自覚したとき、それに代わる生き方として、我々には何があるかということであります。あのコフートは彼の「自己心理学」的な治療法として「代理内省」を唱道しました。しかし我々は自らの「生き方」の問題を他者の「代理内省」に委ねるわけにはいきません。ここで我々のなすべきは、「エゴイズム」ないしは「エゴイスト」という自己自身のあり方を徹底的に「自省」してみること以外にはないのであります。

ニヒリズムと愛

さて、ここで想い起こして貰いたいのは、冒頭での「メロスはなぜ走ったか」や「先生はなぜ自死したのか」についての話に出てきた「倫理」のことです。「倫理」とは、色んな言い方ができるのでありますが、要するに、前述の例を使えば、「お互い相手の信頼を裏切ることはするまい」というように言語化できるところの、人格同士の「共に守り合うべき行為の規範」のことであります。もし「エゴイズム」が「倫理」だとすれば、「人は皆、エゴイストである（のが善い）べきだ」とか「ひとはみなエゴイズムで生きる（のが善い）べきだ」とか、と言われてよいことになります。しかし、誰一人として、「愚かなエゴイスト」でないかぎりは、このように考えはしないのであります。なぜかと言えば、「エゴイスト」としての「私」の望むのは、「私」だけが、「私」一人が、「エゴイスト」であって、他の人すべてが「利他主義者」や「博愛主義者」であることだからであります。したがって「エゴイズム」はけっして「共に守り合うべき倫理」とはなりえないのであります。しかし、いつか我々が「生きる」ことを改めて「よし」として、自覚的にこの一回限りの人生を生き抜く決断をしたときには、たとい「倫理」を自利のために上手に「利用」する「賢いエゴイスト」であっても、必ずや我々の「エゴイズム」は、それとは違う「生き方の原則」としての「倫理」を要請するものとなるのであります。なぜでしょうか。

「エゴイスト」としての私は人生で出会う一切の「もの」や「こと」や「人」を、私にとって「よい」とか「意味がある」とかと規定して、自分のまわりに布置して生きております。とはいうものの、しかし、実は一つだけ、この生き方でもってどうしても価値付けや意味づけができないものがあります。すなわちそれは、その「エゴイスト」としての私自身の存在であります。それゆえに、普通は、私も含めて「エゴイスト」たちの多くは、自分の存在は、他者の存在とは関係なく、それ自体で価値があると勝手に思い込んで生きているのであります。あるいはこれがあの「自己チュウ」論に出てくる「誇大自己症候群」の最極端なのかもしれません。しかしまた、「価値」とか「意味」とかは、色々な言い方ができますが、実は、本性的に二項関係なのであって、「ＡにとってＢは価値がある」とか「Ａに対してＢは意味がある」とかという構造を持っている言葉であります。したがって、「エゴイスト」が、他者の存在との関係を遮断して、自ら、「それ自体で価値がある」と言うとしても、その言い方は、実は、勝手な「うぬぼれ」以外の何ものでもないのであり、事態そのものに即して正確に言えば、自分の存在にはそれ自体としては「価値」も「意味」も無い（nihil）と言うことと同じなのであります。したがってまた、「エゴイズム」ないしは「エゴイスト」としての私の「生き方」とは、実のところは、全体的にみれば、この「ニヒリズム」と表裏一体のものなのであります。

つまるところ、我々が、天にも地にも一回限りの自己の人生・存在の「意味」や「価値」を本気で考えるならば、本気で考えない人は山ほどおるのですが、必ずや、「それに対して」の「それ」であるところの、自己とは独立の他の「こと」や「もの」や「人」が必須となってくるのであります。このことは、「お国のために命をかける」とか、「この絵を仕上げなければ、死ぬわけにはいかない」とか、ということを想い起こすならば、きっと得心して貰えると思います。ここでいま、この「何かにとって」のその「何か」を、「人」の場合で考えるならば、その人とはどういう人になるのでしょうか。それは、まさに我々一人一人が、その「誰か」と「共によりよく生きる」ことを願うところの「誰か」ということになります。ただしその「誰か」は、けっして「私のもの」「私の所有物」ではなくて、我々一人一人に向かい立つところの、他者としての「人格」でなければなりません。その「誰か」を「私の所有物」だと考えてしまえば、我々はあの「ニヒリズム」から永久に抜け出ることができないのであります。

したがって、我々が、自己自身の「エゴイズム」の孕む「ニヒリズム」を自覚した上で、自己の人生を意味あるもの・価値あるものにしようと心底願うのであるとすれな、必ずや、「共によりよく生きる」ことを願う「誰か」と、「共によりよく生きるためのルール」としての「倫理」を思わない訳にはいかないのであります。言いかえれば、その人は、かならずや、「人格の相互尊重」という根本の「倫理」に出会うことになります。「賢いエゴイスト」や「自己チュウ」や「自己愛人間」としての我々が、その「自省心」を深化させることによって必ずや到達

する、「相互に人格を尊重しあって、共によりよく生きる」というこの「生き方」は、思うに、「愛」という言葉でしか言いあらわすことができません。あのフロムも言っております、「愛とは、…愛する人を根本において肯定すること」だ（前掲書95頁）、と。そしてまたそうであればこそ、「愛こそが人生の意味だ」とも「愛こそ、無明の長夜を照らす世の光」とも、言われてきたのであります。しかもまた、「愛されて、愛し返すこと」ができるのは、「もの」でも「こと」でもなくて、もっぱら「人格」だけであります。そしてまた、この他者としての「誰か」を愛する人、その誰かと「共によりよく生きること」を願う人は必ずや自己自身をも愛さないわけにはいきません。この「自己愛」は、ここまで来れば、紛れもなく倫理的な責務なのであり、「自己責任」の事柄であって、けっしてあの「ナルシシズム」でも「エゴイズム」でもないのであります。思うに、これが、フロムたちの言う「真の自己愛」や「本当の自己愛」にちがいありません。そしてまた、この「真の自己愛」と「倫理」とを自覚しながらも、あえてあの「エゴイズム」を優先するとき、初めて、我々の「エゴイズム」は「悪」としての「利己主義」に変質してしまうのであります。

してみれば、いま言えることは、一つは、先に述べた錯綜する意味を持った「自己愛」という言葉も、「自己意識の深化」を基に、「ナルシシズム」から「エゴイズム」へ、「エゴイズム」から、その「ニヒリズム」を踏まえた「真の自己愛」へ、という発達モデルを作り上げれば、一通りは整理が付くということであります。いま一つは、「自己の生き方の原則を尊ぶ心」としてのあの「自尊心」も、その原則が「エゴイズム」である限りは、けっして大した意義を持つものではないのであって、その「エゴイズム」に代わる「生き方の原則」として「共によりよく生きるためのルール」としての「倫理」を採択した「自尊心」こそが、真の「自尊心」であるということであります。そしてまたその意味で、倫理的人格の持つ「主体性」も、それ自体はけっしてその「道徳性」の十分条件ではなくて、必要条件にすぎないということ、このことを我々は改めて銘記しなければならないのであります。

結語に代えて

最後にここで思い起こして頂きたいのは、講義の最初に述べた二つのことです。一つは、「自己チュウ」の「自己中心性」いう特性は、それの持つ倫理学的な意味を深く考えてみるならば、マイナスの意味合いのものではけっしてないということ、いま一つは、「自分のことを第一に考えること」を出発点としなければ、「共によりよく生きる」という意味での「愛」も、「共によりよく生きるためのルール」としての「倫理」も、その本来の姿では現れ出ることはないということであります。このことをいま改めて言い換えれば、我々自身の「自己中心的」な「エゴイズム」が孕む「ニヒリズム」を自ら洞察し自覚することでもって、初めて、我々は、「共

によりよく生きる」という意味での「愛」の人生における意義を本来のかたちで実感することができるということであります。いつか、時が熟して、心底「生きること」を決意した我々が、人格としての自己のこの一回限りの人生を無意味なものにしたくないと思うのであれば、「愛」する誰かと「共によりよく生きること」の重要性を思わないわけにはいきません。そして、またそのためには、その誰かと「共によりよく生きる」ために守るべき「ルール」はどのようなものであるのか、という「倫理的な思索」も、我々はけっして怠るわけにはいきません。倫理学という学問の存在理由は、まさにここのところに存するのであります。

とはいえ、思うに、昨今の多くのパターナリスティックな「自己チュウ」論や「自己愛」論には、あの「エゴイズム」の孕む「ニヒリズム」まで言及しているものは、なぜか、あまりないのであります。このことは、「気づかずにうっかり見落としてしまう事柄」という意味で、その「盲点」であると言われてもよいのではないでしょうか。あのニーチェがその遺稿の中に残した予言は、来るべき二百年は「ニヒリズム」の時代だというものでした。彼のこの予言については様々な解釈がありますが、それは、実は、「ナルシシズムの時代」の「自己チュウ」や「自己愛人間」の異常繁殖を予言したものだ、と考えてみるのも、一興ではないでしょうか。

今日の話しはこれで終わりますが、ここで、いま、ふと思いついたことが一つあります。もっと早く気がつけと言われるかもしれませんが、すなわちそれは、皆さんが学んだ東北学院大学の教育の中核としてのあの「３Ｌ精神」というのは、つまりは“Life, Love, Light”という言葉の含意するところものは、もしかしたら、今日の私の講義の内容からそれほど遠くないところにあると言ってもよいのではないか、ということであります。

ご静聴、ありがとうございました。それでは皆さんさようなら。

追記

本稿は、教養学部の教員有志と同窓会とが主体となって開催された「福地・岩谷教授最終講義の会（2010/2/20）」での講義草稿を一部修訂したものである。